

胃がん内視鏡検診の開始と概要のご案内

平成 28 年 7 月放送

飯田 敦

福井県では、平成 28 年度の胃がん個別検診（こべつけんしん）から「内視鏡検査（ないしきょうけんさ）」が選択できるようになりました。

二州・若狭地区である敦賀市・美浜町および若狭町においてもそれぞれ平成 28 年 6 月、5 月から配布しているがん検診受診券に内容が記載されています。

がん検診は老人保健法により 1982 年から全国で行われてきた、バリウムを飲んでレントゲン撮影を行う「胃透視（いとうし）」による検査があり、検査法も改良されながら現在も行われています。この間、全国の胃がんにかかる罹患率（りかんりつ）はほぼ横ばいの中、胃がんで死亡する確率は 1982 年の人口 10 万人あたり 31.4 人から 2013 年には 11.1 人まで約 3 分の 1 に減少しました。

胃がんの治療法の発展のおかげもありますが、胃がん検診により早期発見されることで摘出術（てきしゅつじゅつ）などの根治的（こんちてき）な治療につながり、胃がんで命を落とす人が減ってきた効果があったと考えられています。胃がんは早期では無症状のため、検診での発見が早期治療に大変効果があるのです。また、がんが広がる前に体から取り除ける治療ができることで、がんで命を落とすことがなく、社会復帰して生活できるようになります。

一方、胃がんが進行することによって、貧血（ひんけつ）や低栄養（ていえいよう）状態が起こることがあります。また、がんが進行して転移（てんい）による症状が起こることもあります。このような状態の方は検診ではなく、まず病院を受診してください。もちろん早期胃がんと同様の治療とはなりません。さらに拡大した手術や抗がん剤を併用した治療を行うことで回復しますが、早期胃がんと同様の治療成績は残念ながら得られません。しかしながら治療法や薬剤の発展により、最近 20 年間でも格段に治る比率や延命して社会復帰できる確率が格段に上がっています。それぞれあきらめずに治療することが大切です。

しかしながら進行がんに対する治療も発達したとは言え、病気が軽ければより良くなる確率は上がります。症状がないうちにがんを発見する検診の効果は大きいのです。

胃がん検診には、会社や地域に検診バスなどが訪れて行う「集団検診」と受診券をもって医療機関に予約して行う「個別検診」があります。

今回、個別検診で、50歳以上の方が隔年（かくねん）で胃がん検診として「胃内視鏡検査」による検診を予約できます。「胃透視」を予約した人、行った人は「胃内視鏡検査」は予約できません。胃がん検診として1回です。

「胃透視」で異常が見つかった人は、「要精検（ようせいけん）」と書かれた「検診結果通知」と健康保険証をもって指定の医療機関に行き、二次検査として「胃内視鏡検査」を受けます。



今年始まった「胃内視鏡検査」による胃がん検診は受け付けている医療機関に予約して、受診券と健康保険証をもって受診します。「胃内視鏡検査」は検診ですので、受診券で市町村補助が受けられて低額の自己負担額です。

「胃内視鏡検査」中に異常が見つかった場合は、組織を取る「生検検査（せいけんけんさ）」を行います。これは「病理組織検査（びょうりそしきけんさ）」とも呼ばれ、がん細胞があるかどうか確定診断になる検査です。この場合は検診の「胃内視鏡検査」以外の部分が通常の保険診療になりますので、保険証を持参してください。

また、「生検検査」では組織を取ることで微量の出血があります。いわゆる「血液さらさらの薬」とも呼ばれる「抗凝固薬（こうぎょうこやく）」をのんでいる人は、普通に血液が固まる能力がありませんので血が止まらない恐れがあります。かならず「胃内視鏡検査」の予約の前に「かかりつけの医師」に自分が飲んでいる薬に関して相談をしてください。一時的に「血液さらさらの薬を休める場合やその期間、あるいは休めない場合などがありますので必ずご相談ください。

「胃内視鏡検査」による「胃がん検診」は、先行して行われた都市や韓国のデータでは、胃がん発見率が胃透視と同等あるいはさらに高いと報告されています。単に胃がんの発見にとどまらず、さらに早期に発見できると、さらに体に優しい治療が選択できる可能性があり、その効果が期待されています。

胃がんは早期には症状がありません。少なくとも2年に1回の毎回、検診を受けることによって、もし胃がんにかかっても、早期発見で体に優しい治療で元気に社会復帰していただける方がさらに増えることを願っています。

ぜひ、かかりつけの先生にお薬の相談をしたうえで、市町村から配布された検診受診券を確認して「胃がん内視鏡検診」を予約してください。